ニューヨーク補習授業校ウエストチェスター校

補習校だより　夏休み特集号

2013年10月12日発行
914-636-3770
56 Harrison Street,
Suite204
New Rochelle, NY 10801

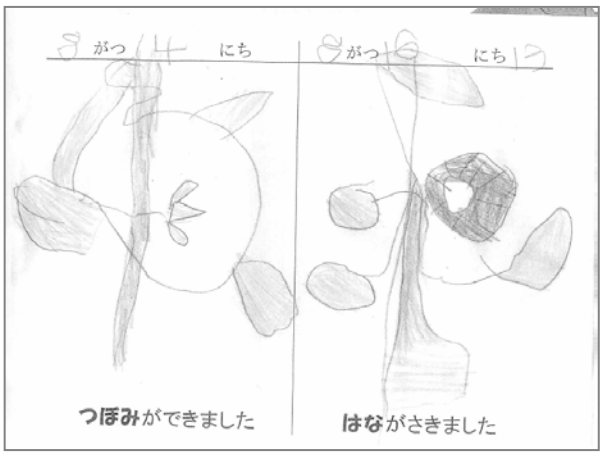
平成二十五(二〇一三)年夏。キャンプ、家族旅行、帰国、体験学習、プレイデート・・・。大切で、かけがえのない思い出がぎっしりつまったこの夏。夏休み中の日記や作文・自由研究などから、夏休みの様子をつづったW校の子どもたちのすばらしい作品を紹介いたします。自分の思い出や貴重な体験と重ね合わせながら、楽しかった夏休みを振り返ってみましょう。



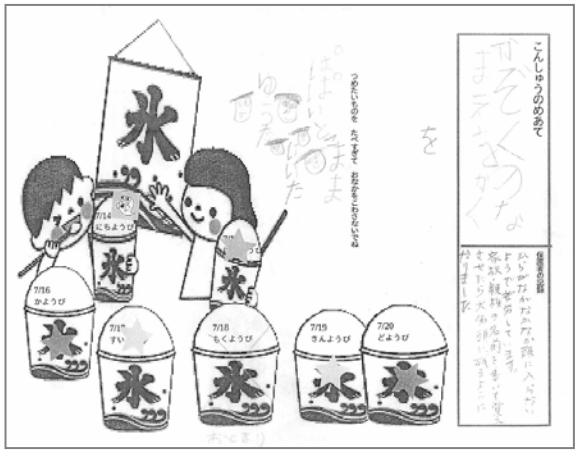
「こんしゅうのめあて」
幼児部１組　阿知波　颯（あちわ　そう）



「あさがおのかんさつ」
幼児部１組　スピーシー杏里咲（ありさ）



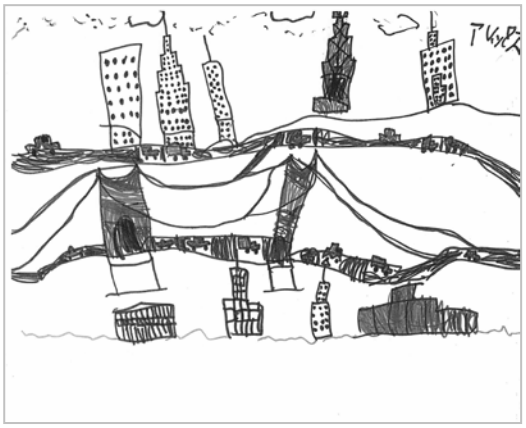
「あさがおのかんさつ」
幼児部２組　田中　洋介（たなか　ようすけ）



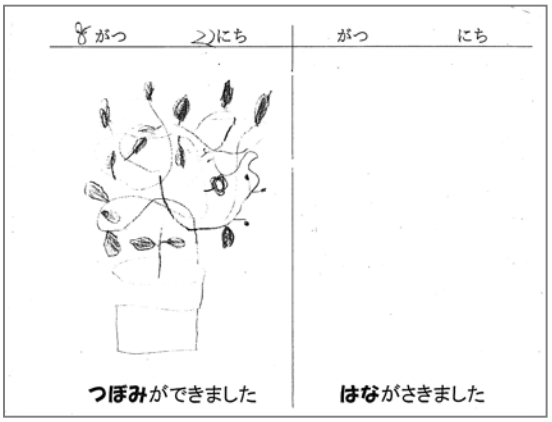
「こんしゅうのめあて」
幼児部２組　渡邉　悠太（わたなべ　ゆうた）



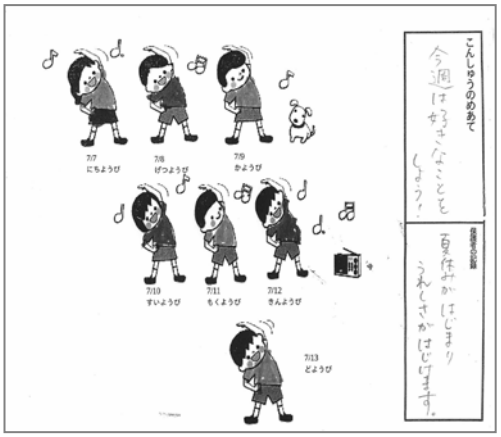
「日本でみんなに会った」
幼児部３組　内野　美月（うちの　みづき）



「東京のレインボーブリッジ」
幼児部３組　ゴードン　アレックス



「あさがおのかんさつ」
幼児部４組　佐久間　広幸（さくま　ひろゆき）



「こんしゅうのめあて」
幼児部４組　ハナガン　ニコラス

「夏休みの日記から　八月六日（火曜日）」

一年一組　成田　龍介（なりた　りゅうすけ）

きょうは二かい目のりょこうにいきました。さいしょにセコイアのこくりつこうえんにいきました。シャーマンしょうぐんの木というせかいさいだいのセコイアの木をみにいきました。山火じにもまけないと、レンジャーにきき、ぼくはおどろきました。そのあとうまをのりにいきました。ぼくのうまのなまえはしろいうまなのにレッドという名まえです。じょうばはたのしかったです。そのあとサンフランシスコにいきました。そこでアルカトラズをみにいきました。そこはにげられないろうやで、ぼくはそこにすみたくないとおもいました。

「夏休みの日記から　七月二十日（土曜日）」

一年一組　中井　優芽（なかい　ゆめ）

わたしはじんじゃのおまつりにいきました。さいしょに、かみさまにごあいさつをしました。それからスーパーボールすくいをしました。つぎにほうせきすくいをしました。さいごにくじびきをしたら、あたりがでて、バンビーのおもちゃがあたりました。ほかにもふえとかおめんをかいました。

にほんのおまつりは、やたいがいっぱいでたのしかったです。

「夏休みの日記から　八月四日（日曜日）」

一年二組　今西　奎豪（いまにし　けいご）

きょうぼくはざりがにつりにいきました。ばけつとわりばしといとを、よういしました。いとにえさをつけました。えさはするめいかです。川でざりがにをつりました。つれたらざりがにがうしろむきにあるいて、かわにもどってしまいました。やっとつれました。たのしかったです。

「日記から　七月六日（土曜日）」

一年二組　伊藤　真彩（いとう　まあや）

きょうはほしゅうこうからかえってきて、おにわにいったら、ほたるがいっぱいいました。おしりがひかっていてとてもきれいでした。ママもビデオをとりました。もうおうちにかえって、はなびのおとがしたので、わたしとおねえちゃん、いもうと、ママで、あるいていったら、きれいなはなびがみえました。さいごはつなげて、はなびがありました。すごくきれいでした。

「日記から　七月四日（木曜日）」

一年三組　福室　賢（ふくむろ　けん）

きょうはよるにはなびをみました。おとうさんとおかあさんとおばあさんとおじいさんとおねえさんとわたしは、おおきなこうえんのしばふのうえにもうふをしいてみんなですわりました。くらくなると、はなびがはじまりました。はなびはおおきいのやちいさいの、あかやみどりやきいろやしろなど、いろんなしゅるいがありました。とてもおおきいおとがしました。

おわってからみんなでかえっているときにまたはなびがあがりました。おとうさんが「まだのこってたんだね。」といいました。

「日記から　七月五日（金曜日）」

一年三組　谷本　更（たにもと　さら）

ひらつかのたなばたまつりにおともだちのゆかちゃんといきました。ぼくはきんぎょすくいをしました。

すぐに、おおきいオレンジいろのきんぎょをすくいました。おじさんがしろいきんぎょをくれて、いえに二ひきもってかえりました。きれいなかざりをみながらたくさんあるきました。とってもたのしかったです。

「日記から　七月八日（月曜日）」

一年四組　バトラー　七海（ななみ）

にほんでたいけんにゅうがくをしました。がっこうのふくはみんなおなじでした。

じゅぎょうでたのしかったことはいろみずでした。いろみずのつくりかたは、あさがおのはなをふくろにいれます。そのふくろにすきなりょうのみずをいれて、ふくろのくちをしめてもみます。そのみずのいろがかわってきました。わたしはたくさんあさがおをいれたので、とてもこいむらさきいろができました。みんなでちがういろになってすごかったです。たのしかったです。

「夏休みの日記から　七月二十九日（月曜日）」

一年四組　鮫島　千咲（さめじま　ちさき）

きのうは、かぞくでヤンキースタジアムにはじめてやきゅうをみにいきました。まついせんしゅのいんたいしきもありました。まついせんしゅは、にほんとアメリカでやきゅうをがんばってきました。がんばったまついせんしゅにたくさんのひとが、はくしゅしていました。わたしがしっているヤンキースのせんしゅは、イチローとジータです。いちばんたのしかったところは、ヤンキースがかって、みんながたっておおよろこびしてたところです。またみにいきたいとおもいます。

「俳句集」

二年一組

はしっても　なみがおいかけ　つかまった　（ビエム　シアナ）
なつのひに　はなびをみたよ　きれいだな　（デイビッド　想太）
なつはいや　なぜかというと　あついから　（橋本　傑）
おんせんは　とてもあつくて　いいおふろ　（甲斐中　亮）
きれいだね　カヤックこぐよ　ひかるうみ　（草場　隼磨）
べにしょうが　うめぼしおいし　にほんすき　（田中　せかい）
そとにでて　ホタルをさがす　子どもたち　（森　栞美）
タ立が　ざあざあと　降ってきた　（永井　欣司）
はじめての　サマーキャンプ　さいこうだ　（西垣　勇飛）
まんげつに　よぞらのほしが　きれいだな　（西澤　優衣）
わたしのね　おとうさんはね　やさしすぎ　（阪本　美羽）
なつやすみ　ながかったけど　みじかいな　（竹田　桃子）
すいかわり　たねがとびちり　まっぷたつ　（滝田　良治）
なつまつり　おかしでいっぱい　たのしいな　（トゥルブラッド真理咲）
なつまつり　ゆかたドレスで　はいチーズ　（ウォーカー　美咲）
ハワイ島　魚といっしょに　およいだよ　（ホワイト　茉梨）
はがぬけた　アイスをたべる　キーンだな　（行田　潤一郎）
せみの声　ミンミンないて　大合しょう　（石井　智大）
バーベキュー　マシュマロやくと　トロントロ　（岩渕　真歩）

「俳句集」

二年二組

せんぷうき　ぐるぐるまわる　めがまわる　（フィッシャー　グレース）
ひこうきは　みみがいたくて　にほんやだ　（合六　翔）
きものきて　しゃしんとるの　しちごさん　（岸田　卓大）
あさがおを　あさにみていて　すずしいな　（中原　亜美）
ぼくのはが　ぐらぐらゆれて　びっくりだ　（中津　賢心）
ラスベガス　むしあつくて　しにそうだ　（野口　ローズ）
くわがたに　ゆびはさまれて　いたたたた　（小幡　慧）
くらいよる　キャンプファイヤー　ゆれている　（大野　栞）
たべたのが　うますぎたから　またいくぞ　（齊藤　謙）
ひこうきで　パンフのまちに　いきました　（田原　和翔）
かみのけの　プールのにおい　とれないな　（武田　麻奈）
カーニバル　チケットかって　はじめるぞ　（鉄野　有希乃）
あついひに　ブルーベリー狩り　おいしいな　（トロッタ　アリア）
かずまくん　あそんであげたら　ないちゃった　（山本　愛美梨）
エッフェルとう　パリのまちなみ　よくみえた　（山下　日有吾）

ふろあがり　ねようとすると　はなびなる　（石川　新和）
ラーメンを　ラーメン屋さんで　食べました　（田村　嶺征）

「夏休み五・七・五日記」

二年三組

きらきらと　光が見えた　ほたるきた　（有馬　佳苗）
雪だるま　思い出すよね　かきごおり　（コクリー美木子）
おにがわら　やねの上から　おこってる　（ダンブロヴ　琢磨）
さむい日に　プールにはいり　かたまった　（遠藤　祐基）
あさがおが　あさにひらいて　よるとじた　（深尾　彩乃）
よるなのに　みんなであそぶ　ゆうえんち　（合六　陸）
おこづかい　いつになっても　たまらない　（ハナガン　ジョン）
チェリーがり　じぶんがとったの　一ばんだ　（原口　舞千）
夏休み　しゅくだい多い　あそべない　（神谷　心彩）
せみのこえ　しずかになって　秋の風　（川上　集）
ピクニック　バーベキューして　たのしいな　（是永　真凛）
しゅくだいは　あさからママが　さけんでる　（松下　天美）
ざりがにが　小さないきもの　たべている　（森　そら）
夏休み　プールに入って　およぎたい　（中山田　直穂）
まん月だ　みんなで話す　しょくじかい　（大西　琳太朗）
夏休み　プールをでたら　かきごおり　（谷本　花）
おかあさん　げじげじたいじ　たいへんだ　（山田　智花）

「夏休み俳句作品集」

二年四組

きれいだな　ほたるがとんだ　ぼくのにわ（ミックグィーン　リアム）
サボテンが　ぐんぐんのびる　ひをあびて（垰　大和）
魚つり　夏のあいだに　なんかいも（松下　隆人）
かきごおり　カルピスのあじ　おいしいな（島田　絢菜）
たのしいな　水でっぽうで　びっしょりだ（ソヴァー　海　トマス）
ひやけどめ　たくさんぬって　さああそぼう（大場　まりん）
花火まつ　空にゆっくり　とぶホタル（笹尾　佳音）
朝がおの　めが出てきたよ　うれしいな（渡邉　喜）
あつすぎる　あせがだらだら　雨みたい（冨田　明花）
すなはまで　山とトンネル　たのしいな（坂本　綾音）
金曜日　サマーキャンプで　ピザたべた（鈴木　真子）
へとへとだ　夏はあつい　こまったな（野本　佑凪）
すなぶとん　なみの音聞き　ひるねする（シュワルツ　吾知）
おまつりに　ゆかたをきたよ　うれしいな（原田　真帆）
ひさしぶり　プールに行って　大あばれ（鈴木　美範）
たべたいな　アイスクリーム　おいしいな（野並　大桜）
たなばたや　ささにたくすよ　ねがいごと（齊藤　譲）
友だちと　きょうもいっしょに　あそんだよ（清水　拓海）
夏休み　日本に行って　たのしいな（伊佐山　莉里香）

「夏休みの日記から　八月一日（木曜日）」

二年五組　荒木　芽依（あらき　めい）

今年の夏休みも、岐阜のおばあちゃんのいえに来ています。わたしは、まい日お手つだいをたくさんしています。一ばんすきなお手つだいはメダカです。まい朝、わたしはメダカにごはんをあげています。メダカは五しゅるいいます。金魚もいます。わたしが近くに行くと、金魚はパチャパチャとはやくおよぎます。金魚はわたしがごはんをくれる人だとわかるみたいで、「早くちょうだい。」と大さわぎします。そして、お昼ごろに、メダカのたまごをとります。だいたい百こぐらいとります。とうめいなので、見つけるのがたいへんです。でも、一週間後に赤ちゃんが生まれるので、がんばっています。たまごはとうめいなのに、生まれてくる赤ちゃんは色がちがうのでふしぎです。来年も日本に行くのが楽しみです。

「一ばんローラーコースター」

二年五組　ミッチェルスキ　ジョナサン

夏休みのさいごの週に、オハイオ州のひいおばあちゃんの家に行ったとき、シーダーポイントゆう園地に行きました。そこは、いろいろなしゅるいのローラーコースターでいっぱいでした。ぼくは、お父さんとお母さんといっしょに、十しゅるいものローラーコースターにのりました。

はじめに、ブルーストライクです。さいしょだったので、上ったらドキドキしました。でも下におりたら、もっと高いローラーコースターにのりたくなりました。

つぎに、三百八フィート高さがあるミリオンホースです。のってすぐに早く上がって、きゅうにすごいはやさで下りました。上に下に、上に下にと、まるで鳥のようにとんでいるみたいでたのしかったです。トンネルに入ると、その中で、しゃしんをとられました。そのあと、まっすぐ行って、さかさまになりました。そして、やっととまりました。ぼくは、おりたとき、しんだとおもいました。あとでトンネルの中のしゃしんをみると、ぼくはうれしそうなかおをしていました。シーダーポイントゆう園地にもう一回、いいえ、もう二百回行きたいです。

「スリープオーバー」

三年一組　諸岡　暖乃（もろおか　はるの）

わたしは、友だちの家にスリープオーバーに行きました。友だちの家では、本を読んだり、お人形であそんだりしました。

わたしの友だちはいつもより声が大きくてわたしはびっくりしました。その子のママが「楽しくて張り切っているんだよ。」と言っていました。考えてみると、わたしもちょっとはりきっていたみたいです。

友だちがもうひっこすのでテレビを売ってしまったのでケーブルテレビのボックスをプロジェクターにつなげてかべにうつしてテレビを見ました。大きな画面だったのでえい画館みたいでした。

ねる時には、わたしがまんなかで友だちが右のはしっこで妹が左のはしっこでねました。次の日、わたしの友だちがわたしのことをおこしてくれました。スリープオーバーが楽しかったので、また友だちとスリープオーバーをしたいです。

「ピザづくり」

三年一組　冨田　実（とみた　なお）

今日、コモングランドという、夏のキャンプの最後の日に、ピザを作りました。はじめに、ピザの生地を作りました。大きなボールに、粉とさとう、油、しお、水を入れてよくまぜました。みんな、一人ずつ小さな生地のかたまりをもらって、丸く広げました。その上にトマトソースを広げました。そうして、庭からとってきた野さいのオレガノとバジルをのせました。さいごに、その上に、チーズをのせてやきました。それをみんなで食べました。おいしかったです。

「動物園に行ったよ」

三年二組　小池　航央（こいけ　わたる）

今日、家族で動物園に行ってきました。チンパンジーみたいな動物を見に行ったとき、クジャクが人の歩く所に出てきていたのを見つけました。どうしてこんな所にクジャクがいるのかお母さんに聞いたら、「さくのすき間から出てこられるんだね。」と教えてくれました。

日本の動物園では、動物が人の歩く所に出ていることなんて、一ども見たことがなかったのでびっくりしました。

「ＩＣＥＡＧＥ」という短いえいがが動物園の中でやっていて、これが一番楽しかったです　動物がくしゃみをすると、本当に顔に水がかかったり、雪がふる場面ではこな雪がふったりしてきました。草のむちが、動物をたたく場面では、本当にいすの下からむちのよ

うな物が足にさわったのでびっくりしました。また、どこからなにが出てくるかはらはらどきどきでした。

「ディズニーシー」

三年二組　白倉　まや（しらくら　まや）

きょうは、わたしのおにいちゃんのたんじょう日です。わたしの家族とわたしのおばさんで、ディズニーシーに行きました。わたしの家族とおばさんでお水の中にうかぶライドにのりました。わたしとおかあさんとおばさんで一つのカートにのって、わたしのおにいちゃんとおとうさんがもう一つのカートにのっていました。のりはじめたら、「あっー！」、きゅうにライドがとまりました！　そして、すこしまたなければなりませんでした。だんだん水がすくなくなって、おばさんがカートにきて、くつにつけるビニールぶくろをくれて、お水の中を歩いていきました。その後、みんなにチケットをくれました。どんなライドでも先にのれるチケットでした。アクシデントがあったけれどとてもたのしかったです。

「家族でキャンプ」

三年三組　高階　麻里奈（たかはし　まりな）

土曜日から日曜日、家族とキャンプに行きました。二時間くらいかかりました。キャンプ場についたら、みんな楽しそうでした。テントをたてて川にあそびに行きました。土だらけですごくきたなかったけれど、きもちよかったです。弟はバシャバシャ頭を水のなかに入れて泳いでいました。わたしも妹といっしょにゆっくり泳ぎました。川のまわりのキャンプ場はキャンピングカーだらけでした。三十分くらい水の中であそんだらテントの所にかえりました。お父さんが買った小さいバーベキューセットで夜はバーベキューをしました。わたしは肉をひっくりかえすのをやりました。みんなおいしく食べおわったら、お父さんがキャンプファイヤーをやってくれました。かみを火に投げて、もえるのを見ました。火がきえたら、みんなテントの中に入ってねました。

次の朝、おとうさんが早おきして朝食の準備をしていてくれました。あたたかいスープとパンでした。食べおわったら、海に行きました。ビーチボールとすなであそびました。帰る時間になったので、テントとかをしまい、家に帰りました。

「ケープコッドりょ行」

三年三組　小杉　恵周（こすぎ　けいしゅう）

夏休みに、いとことおばさんと家族とで三泊四日のケープコッドりょ行へ行きました。二日目はホエールウォッチングに行きました。高速船にのって一時間ぐらいの所でクジラを見ました。ケープコッドのホエールウォッチングのポイントには、えさ場があるそうです。日にちとか天気によってえさ場は変わるそうです。去年の七月にも来ましたが、船がぼく達を連れて行ったポイントはちがいました。クジラが船の左右交ごに出るので、みんないすから立ってさくにしがみついて写真をカシャカシャとったり、ビデオをとっている人もいました。ぼくもカメラでとりました。

船から遠い所でクジラがしおをふいたりすると、船で近付くので思ったより近くで見えました。全部で十頭くらいで、見たのはすべてしおふきでした。だいたいザトウクジラでした。まず頭が半分くらい見えて、海水と空気をプシューと出します。そして背中が平べったく見えて、たまにしっぽが見えます。

クジラをたくさん見ることができて楽しかったけれど、ジャンプをする場面が見られなかったのはざんねんでした。

船から降りてさん橋の売店にぬいぐるみがありました。ほかに土ゴンドウクジラ頭のほねとクジラのひげとプランクトンがてんじしてありました。ゴムでできた魚もありました。いとことぼくは同じシロナガスクジラのぬいぐるみを買ってもらいました。

りょ行でほかに心にのこったことはまっくらな海岸で見た夜の星です。流れ星におねがいごとをしました。去年とまったホテルよ

りけしきが良かったです。

「『目の見えないダン』を読んで」

四年一組　那須　咲代（なす　さよ）

「盲導犬は、目の見えない人を助けてくれるのに、目の見えない犬は、どうしてすてられちゃうの？」私はそう言った望さんと希さんに感動しました。二人は、目の見えない犬ダンのために地区の世話人や団地の人達に何回も心からお願いして、がんばりました。私は、この子たちは勇気を出してききに行ってえらいなと思いました。二人は、ダンのためにとても強い言葉を言いました。この言葉は、団地のみんなの考えをかえるほど印象にのこる物だったのです。私は望さんたちがこのような言葉を言ったのはダンが大好きだったからだと思います。だから、ダンの命をすくう事が出来たのでしょう。私の父はよく、「どうしても正しいと思えない事は努力してかえられるようにがんばりなさい。かえられない事を受け入れる強さを持ちなさい。」と言います。望さんたちは、ダンを見つけた時、ダンの命を守るために団地で飼わなくては死んでしまうと思ったのです。団地ではペットを飼ってはいけない事になっていたけれど、望さんたちは地区の世話人と何度も話して、やっと団地でダンを飼える事になったのです。二人はどうしても目の見えないダンを団地のペット禁止ルールのせいで手ばなすという事が正しいと思えなかったのでしょう。だから、望さんたちは自分達が出来るだけの努力をして、ダンの事を団地のみんなに伝える事が出来たのでしょう。私は信じる事をつらぬいた二人をすごいと思います。ダンは目が見えません。その事をみとめた二人は、「かえられない事を受け入れられた」のです。私はこの本を読んで、父の言葉はとても大切なのだなとあらためて感じました。私は、望さんと希さんはダンの命を助けるために、勇気を出し、ルールをかえられた事にとても感動しています。私も二人のように他の生物を守れる、強い人間になりたいです。

「俳句」

四年一組　太田　翔允（おおた　しょういん）

大雨で　ぼくのよていも　どしゃくずれ

「家族旅行」

四年二組　原口　はな（はらぐち　はな）

わたしはペンシルバニアに家族旅行に行きました。最初の日、ハーシーチョコレートワールドに行きました。最初の乗り物に乗りました。その乗り物に乗ったら、チョコレートの作り方が分りました。わたしは、ミルクとさとうだけであまくしていると聞いてびっくりしました。あじみコーナーもありました。わたしは、食べたらほんのりあまいかおりがミルクチョコレートが一番好きでした。バスの中で歌を歌ったり、ハーシーチョコレートワールドのことをせつめいしたりするのもありました。その時に、「写真をとろう。」と言っていたけれど、バスが速すぎてとれませんでした。バスで、ハーシーズのチョコレートを食べたらもう死んでもいいくらいしあわせでした。自分のオリジナルのハーシーズを作れました。自分の好きなトッピングができます。わたしのチョコレートが作られているところを見ることができました。それで自分でカバーもデコレートできます。わたしはいっぱい絵をのせました。行く時は、こんな目がとびでるほど楽しいとは思っていませんでした。

次の日、クレヨラファクトリーに行きました。最初に何こかのコインをもらって自分の名前が書いてあるクレヨンを作りました。ボタンをおして作るボールペンを作りました。ねん土ももらってグミみたいにぷにょぷにょでした。さけびたくなるくらい楽しかったです。

「夏休みの日記から　七月十九日（金曜日）」

四年二組　シュワルツ　世音観（しゅわるつ　せねか）

今日、私は京都の下鴨神社の「みたらし祭」におばあさんと妹とお母さんと四人で行きました。「みたらし祭」は境内にあるみたらし川に足をつけ、無病息災をねがう夏祭りです。境内に入りくつをぬいで、お参り料二百円をはらってろうそくをもらい、みたらし川に入ります。川の水は思っていたより冷たく、氷水のなかを歩いているようでしたが、私にとっては気持ちよかったです。とちゅうでろうそくに火をつけて川の中を歩き、最後に献灯台におきます。その後、川から上がり、くつをはいて「ご神水」をのみました。この時も両うでにご神水をたっぷりとかけてもらいました。

私は三さいの時から毎年日本に帰っていますが、こんなお参りをしたのは初めてでした。お参りをした後は、ふしぎなことに、本当に私はだれかから守られているような気がしました。

「夏休み作品（俳句集）」

四年三組

夏休み　友達できた　一人旅　（上田　伸明）
夏休み　宿題いっぱい　夏休み　（野口　花菜）
夏休み　宿題いっぱい　大変だ　（永井　里奈）
夏祭り　おどれよおどれ　楽しいな　（ジョーンズ　海　アーサー）
夏休み　いろいろできて　うれしいな　（中村　玲）
夏休み　たべるとおいし　かきごおり　（宮崎　嘉縫）
夏休み　プールで泳いで　あそぼうね　（本田　英翔）
夏休み　もうすぐおわり　さみしいな　（今西　優豪）
夏休み　空が高くて　鳥がとぶ　（コーネル　未亜）
木の上に　せみのなきごえ　夏休み　（グレイ　ダニエル）
池の中で　泳ぐのは好き　いっしょにいこう　（林　蓮太郎）
夏休み　年に一度の　パラダイス　（早田　尚生）
夏休み　あちこち出かけ　まっくろに　（日比野　匠）
夏休み　思い出できた　たのしいな　（前田　明日香）
かきごおり　どれにしようか　夏祭り　（中村　真里菜）
夏休み　あついよあつい　ものすごく　（小川　勝徳）
夏休み　楽しみたくさん　あるんだよ　（大島　颯士）
夏休み　自由時間に　外遊び　（パレンテ　凛映名）
ゆかたきて　みんなでおどる　夏祭り　（鈴木　結子）
まっくらな　夜の中で　夏祭り　（田原　百萌）
夏休み　宿題いっぱい　大変だ　（髙橋　彩子）
夏祭り　いつもびっしょり　あせだらけ　（竹淵　はな）
友達と　夏祭り行く　夏休み　（武神　亜弥）
夏祭り　花火きれいだ　かがやいた　（竹内　琴菜）
夏休み　宿題いっぱい　大変だ　（上野　優太）

「夏休み川柳」

五年一組

ロンドンの　午後の紅茶がおいしいな（山下　英雄）
朝早く　野球があった　つかれたな（尾形　湧音）
さようなら　日本の家族　また来年（パルミエリ　ケイシー）
エプコット　日本館に　だがし屋が（奥山　智美）
一時まで（夜中の）　ディズニーランド　遊んだよ（伊藤　向日葵）
ピクニック　バーベキューして　楽しいな（是永　陸）
見ちゃったよ　あっという間の　流れ星（本澤　世成）
トマトの実　毎日だんだん　太ってる（ビエム　アディア）
始まった　サマーキャンプ　うれしいな（櫻井　心大郎）
夜の空　まん月が出る　まぶしいよ（長浜　ショーン）
友達と　こわい話で　もり上がる（内藤　美遥）
日やけ止め　どんどん少なく　なっていく（鳴瀧　奏美）
友達と　花火をやって　楽しいな（勝野　空詩）
夏休み　まつりで遊ぶ　楽しみだ（山崎　ホールデン）

「夏休み川柳」

五年二組

自転車と　かっぱずしまで　もうダッシュ（阿部　純子）
はやおきだ　ラジオたいそう　つづけるぞ（荒井　海生）
夏休み　今日からてつ夜で　ゲームだぞ（荒木　翔満）
とうきょうは　いっぱいやること　すごくある（福地　絵実莉）
うれしいな　やっと会えたよ　友達に（伊丹　瑠菜）
空の花　夜空にうかび　消えていく（木谷　希望）
飛行機の　ドアが開いたら　アメリカだ（村上　涼風）
コーヒーは　つちのいろだな　あじもだな（中畑　龍馬）
美術館　ずっとたってて　つかれちゃう（大村　七海）
委員会　うさぎのせわが　大変だ（立本　浩大）
夏休み　残り数えて　もり下がる（田中　悠介）
ついてから　おみやげいっぱい　買ってやる（豊村　真帆）
山の上　うるしのにおい　おわんから（上田　真愛）
祖母たちが　むかえに来たよ　うれしいな（山本　明澄）
夏休み　エアコンきかぬ　あつすぎて（吉木　一誓）

「夏休みの俳句」

六年一組

あさはやく　おきてビーチへ　行きました（後藤　安奈）
ほたるたち　きれいな夜空を　飛んでゆく（長谷川　楓乃）
夏の夜　空をまう星　美しき（保山　健人）
キャンプで　ともだちできて　うれしいな（伊藤　優衣）
なつやすみ　にほんへいくの　まてません（神野　圭五）
ひさびさに　プールはいれて　きもちいい（川上　咲貴）
みずしぶき　たくさんあびた　ナイアガラ（小島　大洋）
ゆかた着て　花火大会　見にいこう（クリーグ　イザベル）
かき氷　イチゴの味が　なつかしい（三井　大輝）
八月だ　ケープコッドへ　行くんだよ（宮田　理貴）
足に水　口にはポテト　あつ冷たい（南部　賢進）
かたづけが　たくさんあるよ　終わるかな（パレンテ　夏惟美）
つかれたな　りょこうだった　ひやけした（霜島　静）
暑い日は　海に入って　まっくろけ（高橋　理沙子）
ビーチにきて　なみにのまれて　けがをした（手塚　耕平）
友達と　いっしょに海へ行く　泳ぐの好き（トロッタ　ソフィア）

「夏休み作品集　短歌（俳句）」　六年二組

ショベ　望明　日本でも　小学校に　行くぼくは　毎日宿題　たいへんです

土井　貴智　友達と　電車に乗って　モール行き　ゲームセンター　行ってきました

ギャグリアルディ　幸　時差ぼけで　ねむくて寝たい　おきれない

飛行機やだ　おわってよかった　飛行機こわっ

ヘイズ　ガイタノ　この夏は　日本に行って　楽しかった　いっぱい遊んだ　なつかしい友

廣瀬　澪南　富士の山　まちにまって　世界いさん　登録された　有名な山

北出　航太朗　初めての　郵便局に　自分だけ　手紙を出して　うれしかったな

フォング小山　笑鈴　海に行く　きれいで青い　水を見て　きれいな砂で　楽しく遊ぶ

ランポート　ハナ　大とりい　ひき潮で見た　宮島で　びっくりしたよ　その大きさに

松本　夢　真っ黒な　友達を見て　大ばく笑

ひまわりや　頑張って咲く　暑い中

松山　日菜子　夏休み　花火大会　きれいだな

夏休み　暑い夏には　スイカだね

三橋　健人　きょうもね　家族とつりに　海でした　大きい魚　ぼくつかまえた

セルビー　瀬奈　楽しみは　マッチポイントで　強く打つ　相手が追いつく　わけがない時

柴田　理見　夏休み　ケニアに行って　いろいろな　動物を見て　写真もとった

武貞　悠太　感じるぞ　太陽の熱き　情熱を　真っ直ぐ立つのも　しんどいくらい

辻村　健太　ツートンで　辺りを包んで　反響し　インディアンの　ふえの音色

山田　珠与　きんちょうした　サマーキャンプ　始めの日　友達作れて　うれしい私

「夏休みの出会い」

中等部一年一組　ボールドウィン　サラ

夏休みにニューメキシコにあるアルバカーキという町に行ってきました。そこで不思議な出会いがありました。その町は映画で見る昔のメキシコのようなところでした。きれいなオレンジ、緑、白、レンガ色などが町にあふれています。多くの人が行きかう道を歩いていたときのことです。青緑色が鮮やかなターコイズのイヤリングが目に飛び込んできました。これまでの人生で見た中で一番きれいな石でした。自然と足が止まり、そのイヤリングをじっと見つめていました。

「Good morning, young lady.　あんたは私の売っているターコイズ・イヤリングを買いたがっておるようだな。どのイヤリングがいいのかのう。さあ、選びんさい。」そこに座っていたのはアルバカーキではよく見かけるネイティブアメリカンでした。私はびっくりして「こ、これ、ください！」と思わず叫びました。「はっはっは。いいのを選びましたな。十ドルになります。」お金を払い、そのインディアンのおじさんに話しかけると、「わしはプエブロ・インディアンなんじゃ。わしらはほとんどこんな仕事しかないんじゃよ。」と語り始めました。「わしたちが普通の仕事をするところをあんまりみないじゃろ。それは、文化が白人とぜんぜん違うからなんじゃ。普通の仕事をやろうとすると人種差別されるんじゃ。」おじさんの話は私の心を打つものでした。

昔のアメリカ映画ではインディアンはいつも怖くて悪い人なのに、私が最初に出会ったインディアンはにこにこ笑っていて、思っていたよりずっとずっと優しかったです。コネチカットに戻ってからもこのおじさんのことを思い浮かべています。ターコイズのイヤリングに込められたおじさんの優しさとプエブロ・インディアンの強さを、私は一生忘れることはないでしょう。

「僕の白熱夏休み」

中等部一年一組　細野　露可（ほその　ろか）

僕は今年の夏休み、大阪市立坂南中学校という中学校に二週間、体験入学をしました。

若い男の数学の先生が僕の担任でした。初めて学校に挨拶に行った時、制服のシャツ二枚、学校指定の黒いリュック、スポーツバッグ、運動服、体育館シューズを全部そろえて貸してくれました。

中学への体験入学は初めてなので最初は、かなり緊張しましたが、クラスの雰囲気もなごやかでその上、小学校から仲の良い友達も同じクラスだったので、すぐにクラスに慣れることができました。

この学校では国社数理英の全科目が大阪弁で行われます。まるで漫才のようです。僕は最初なんだか可笑しくなり笑ってしまいました。担任の先生はクラスではニコニコ話しながら、よく冗談とか言ってるけど、時に、「さあ、ここからは真剣に聞いてや。話したらあかんでぇ。」とビシッと注意します。自分のお母さんのことを「おかん」と呼びます。気がつけば、僕もすっかり大阪弁で話していました。

クラスのみんなとても親切で、わからないことがあると、すぐに誰かが「これはこれやで。」と教えてくれます。たまたま僕がいじめっ子とぶつかってしまい、

「なんだ、バカヤロー」

と怒鳴られたときは先生が飛んできてくれました。

「細野にそんな風に言うたら、あかんやろ！」

すると、いじめっ子は顔を見合わせて、

「はい、すみませんでしたぁ。」

とにやっ。思わず僕もにやっ。

また、僕は野球部にも入ることができました。初めは坂南中野球部なんてたいしたことないとなめていたところ、気温三十五度のグラウンドで五時間も猛練習をするのです。よくみんな頑張れるなあと感心しました。監督は、少しこわく、野球一筋な感じの人で、一生懸命に生徒に野球を教えていました。

野球部では先輩、後輩の関係が厳しく、僕たち中一は、中二、中三と敬語で話さなければなりません。僕はどう挨拶したらいいのかわからずビビッていましたが、先輩と目が合った時、友達のまねをして帽子をとり「こんにちは。」と頭を下げて挨拶しました。先輩たちは意外に優しくて、中には

「細野、おまえ、アメリカから来てんねんやろ？　敬語、使わんでもええで。」

と言ってくれる人もいました。

僕は最初は、学校の校舎の周りを七周走るのにも、全くついていけず、くたびれて倒れていると、中一の仲間が、

「細野、頑張れよ。」

と、励ましてくれました。

一週間経つ頃には、なんとかついていけるようになりました。先輩たちのプレイは、アメリカの僕が入っているリトルリーグと比べると、真剣そのもので、技術レベルも高かったです。練習の時でも「おーーー」と常に声を出して、全員が気合いをいれていました。

中三の試合があった時のことです。僕たち一年生は、十一曲も応援歌を覚えて、打席に先輩が立つたびに、それぞれの先輩の歌を大声で歌って応援しました。炎天下での応援に、最初はヘロヘロになっていましたが、だんだん慣れていき、途中からは、しっかり応援できるようになりました。ＰＬ学園中学と対戦して、先輩たちが勝利したときは、本当に感動しました。四回戦まで勝ち進み、最後に高月十中に負けたときは、僕もめちゃくちゃ悔しかったです。中三にとっては、これが最後の夏だったので、タオルをかぶって泣いている先輩もいました。

今年の日本は猛暑で本当に暑かったけれど、僕にとっては、とびっきりの夏になりました。教頭先生にお別れの挨拶に行ったところ、

「良かったら、ぜひ来年も来てくださいね。」と言ってくれました。

来年の夏は、坂南中の二年生として野球部の皆と同じ三ミリの坊主

頭になって、試合に出してもらえるように根性で頑張りたいと思っています。

「青公園」

中等部一年二組　田岡　真実（たおか　まみ）

風が吹いている。

笑い声。足音。ブランコの揺れる音。すべて重なって聞こえてくる。私は家から駆けだしてみんなに加わる。それが当たり前で、幸せで、ずっと、たくさんの人の大切な場所になれるんだって、そう思ってた。

青公園。　子供たちはそう呼んでいた。本当の名前で呼ぶ人はほとんどいない。青公園は私の家の前にあって、フェンスも遊具もすべて青。広い公園というわけではなかったが、私には思い出のある公園だった。

小さい時から青公園に行って遊んでいた私にとって、青公園は庭のようなものだった。放課後、一人でブランコに座って気持ちを安らげたり、友達とブランコに乗って、おしゃべりした。となりでは男の子たちが野球をしていて、転がってくるボールを拾ってあげた。

五年生の秋、青公園の掲示板にはり紙があった。そして公園は閉鎖された。

この夏、日本に帰国したとき、真っ先に青公園に向かった。私が見たのは遊具もベンチも何もないただの空き地だった。野球の練習も、ブランコでおしゃべりするのも、ただの「思い出」になってしまったのだ。

その時、一人の男の子が、フェンスを登り、中に入っていった。そして前と同じように、友達と遊び始めた。彼にとっては青公園は「思い出」じゃないのだと思えた。私は微笑んだ。

一人一人の中に、「青公園」は存在する。それは「思い出」なのか、わからないけど、青公園は確かにここにいる。

風が吹いている。公園にも、空き地にも、心にも―。

「弟とクッキーと『ライオンと魔女』」

中等部一年二組　デイビッド美雨（みう）

私は夏休みにC・S・ルイス著『ライオンと魔女』を読みました。これは第二次世界大戦争中、戦火を避けるために田舎に住む知人のカークの家に送られたピーターとスーザン、エドマンド、ルーシーの四人兄弟のお話です。

田舎のカークの家で、ルーシーは魔女の国ナルニアに行くドアをタンスの中で見つけます。そして、そのドアからナルニアに行くことにしました。ルーシーはナルニアでタムナスという子鹿に会います。ところが彼女が再度ナルニアに戻ったとき、タムナスは姿を消していました。タムナスがナルニアに人間が入って来るように仕向けたので、怒った白魔女がタムナスを彼女の城に閉じ込めてしまったのです。そこでピーターとスーザン、エドマンド、ルーシーの四人はタムナスを助ける旅に出ます。四人は協力して戦い、とうとう白魔女を倒すことができたのです。

この物語は「協力すると何かを達成することができる」ことを教えてくれました。夏休みに弟と一緒にクッキーを焼いた時、そのことを実感することができました。

私はクッキーを焼くのが好きで、その日もクッキーを焼く準備を始めました。いつもは見ているだけでゲームに夢中になっている五歳年下の弟が、突然いっしょに作りたいと言い出したのです。ちょっと面倒かなあと思いながらもたまにはいいかと思いいっしょに作ることにしました。

弟はあれこれ話しかけてきて手も出してくるのでので、最初は足手まといに感じていました。一人で作った方がよっぽど簡単、よけい手間がかかると思いながらも作っていくうちに、私の手が粉で汚れているときにベーキングシートを鉄板に広げてくれたり、クッキーを丸めてくれたり、デコレーションを二人であれこれ考えたり。自分一人でクッキーを作っているときよりずっと楽しくなっていきました。しかもいっぱいの数のクッキーを焼くことができました。

そして何よりも、協力して焼いたクッキーはいつものクッキーより何倍もおいしかったです。弟もにこにこしながら「おいしいね。」と、とても満足そうでした。今度、時間のある時にいっしょにケーキを焼いてみたいと思います。

「夏の思い出」

中等部二年　長谷川　瑛己（はせがわ　えいき）

今年の夏、日本に帰った時に、僕の家族と僕の祖父母、お母さんの妹家族の合計十人で三重県伊勢市に旅行に行きました。一日目は、伊勢神宮という所に行きました。今年は二十年に一度の式年遷宮の年なんだよと言われたけど、意味がよくわかりませんでした。二十年に一度、社殿を造りかえるということだそうです。神社に行くまでには、いろんな食べ物屋やおみやげ屋が並んでいました。面白かったのは、お店でいろんな焼き魚を自由に試食できることでした。食べると香ばしくて身が柔らかくてとても美味しかったです。

ホテルに着いてから、いとこたちと温泉に入りました。いろんな風呂があったけど、全部に入りました。お風呂から出たら、すぐ夕食の時間でした。お腹がとてもすいていたけど、大人と同じだったから食べきれないくらいの量が出ました。どれも美味しかったけど、特に肉の料理が美味しくてもっと食べたいと思いました。夜は、皆で布団に寝転びながらテレビを見たりしました。

旅行の二日目には、魚釣りをしました。ホテル前の桟橋で魚釣りができると聞いたのです。初めて魚釣りをしたのは、日本のキャンプ場でした。マス釣りをして、釣った魚を塩焼きにして食べた楽しい思い出があったので、また魚釣りをしたいなと思っていた僕にとっては、パーフェクトでした。前の日から魚釣りを楽しみにしていたので、めずらしく早起きをして、朝ごはんを食べた後、すぐに竿を借りに行きました。フロントで人数分のバケツとえさと竿をもらって、ホテル前の桟橋に行きました。竿は大きい魚用のではなく、長い棒に糸と針がくっついた簡単な竿でした。最初、自分でえさをつけてみたけど、すぐに取れてしまうので、魚釣りの経験があるおじいちゃんに手伝ってもらいました。えさをつけた後、竿を水に投げ込み待ちました。ずっと待ってたけど、何も反応がないので、竿を上げてみたらえさがなくなっていて、食べられたんだとわかりました。ぼくは、ずっと待っていたのに、知らない間にえさを食べて逃げられたんだと知って悲しかったです。その後は、もっと糸の動きに集中して釣ろうと思ったけど、全然釣れませんでした。三歳下のいとこやお姉ちゃんは、隣の桟橋で何匹も釣れていたので、うらやましいと思いました。僕は、あきらめていとこたちの方へ行きました。すると、すぐに一匹目が釣れました。僕が釣ったのは小さいフグでした。僕の人生で二匹目の魚でした。小さいけど感激しました。フグを針から取ろうとした時にぷくっとふくらんだので驚きましたが、自分で取ることができました。その後も何匹も釣れたけど、なぜか全部小さなフグしか釣れませんでした。二時間たって、みんなのを合わせたら三十匹くらいありました。違う魚を釣れなかったことは残念でしたが、みんなで楽しめたのでとてもいい経験だったと思います。

「私の夏休み」

中等部二年　山口　香蓮（やまぐち　かれん）

今年の夏は私は今まで過ごしてきた中で一番心に残った夏休みでした。今年初めて行ったキャンプでの思い出は私の心の中に深く刻まれています。

キャンプ初日、キャンプに行くこと自体が初めてだった私は、この先二週間やっていけるかとても不安でした。私をキャンプに誘ってくれた友達は他のキャンプの子たちと遊んでいて、マーケッツジムというところで一人ポツンと友達を眺めながら座っていました。そうしていたら、「はーちゃん」という私のグループのリーダーが隣に座ってくれました。はーちゃんはいっぱいお話をしてくれて、気持ちが大分楽になりました。私の班はG（ガールズ）3。「のん

（十五才）」「さき（十四才）」「エミリ（十四才）」「美鈴（十四才）」とリーダーの「はーちゃん（二十才）」と一緒になりました。初めはほとんどみんな年上で、少し緊張していました。でも時間が経つにつれてどんどん仲良くなっていきました。

キャンプでは寒い日が続き、なかなか泳ぐチャンスがありませんでした。キャンプ五日目にしてようやくコール湖の水温が泳げる温度になりました。ここでは泳力チェックというものがあって、それでどの場所で遊べるか決まります。何メートルか泳いでブルーレベル、立ち泳ぎ二分でグリーンレベル。ブルーを落ちた場合はイエロー。浅い場所でばしゃばしゃ遊ぶエリアしか行けません。私はイエローでした。泳ぎ方を習ったことのない私は、五メートルのところで足が下についてしまい、失格でした。みんなはグリーンまでできるのに、私だけイエローなのが悔しくて、その場で泣いてしまいました。その後も水泳の時間が終わるまで陰でぐずぐずしていました。数日後受けた時も、やっぱり泳げなくて、また泣いていました。そしたら同じ趣味でよく話していた「あゆみ」という子が隣に来てくれました。

「大丈夫。私もイエローだ〜。」

と言って励ましてくれました。あゆみは一つ年下だったけれど、同い年のように思って色々と相談したり、話をたくさんしました。とっても元気な彼女といると、自然に私も元気になっていました。

キャンプには、前から仲が良かった男友達が二人いました。その二人と、同じグループだった二人と、ちょっと甘酸っぱい青春もありました。ある一人の男子が女子に告白したところ、OKがでてめでたく付き合うことになりました。二人とも私の大好きな友達でした。

「ねえ、知ってる？　A君がBさんのことを好きらしいよ。」

キャンプ三日目くらいから、こんな噂が流れていました。最初は「へ〜」ぐらいの気持ちでしたが、時間が経つにつれ、「ちょっとやだな」と思い始めるようになりました。そんな時、A君がいる班との合同プログラムがありました。ピザを作り、キャンプファイヤーをコール湖の隣でやるというプログラムでした。食事を作って、みんなでギャーギャー騒ぎながら暗い夜がやってきました。気温も冷え込み、みんな火のまわりではしゃいでいました。私の前で、噂の二人が隣同士で座っているところを見ると、急に泣きたくなりました。私はその場からちょっと離れたところで、星空を見ながらこっそりと泣きました。

その出来事から、自然とその男子のことを無視するような態度をとってしまうようになりました。それに気づいたはーちゃんは、私に言いました。

「彼は、友達に無視されたり、忘れられたらつらいと思うよ。」

それを聞いて、私は色々と考えなおしました。そして、私は気持ちの整理ができました。私は、その男子と今まで通り気軽に話せなくなるんじゃないか。もう友達ではいられなくなるんじゃないのか。それが怖かったのです。好きな女の子と仲良くなって、私から離れていってしまうのがさみしかったのです。その気持ちをその男子に手紙で伝えたら、

「おまえ、アホか。」

と笑って言われました。彼は私にとって掛け替えのない存在なんだなと思いました。このキャンプに来たことによって、「友達」というものの価値がよくわかり、彼とも今までよりも絆が深まりました。

キャンプ最後の日、みんなで泣きながらキャンプソングを歌いました。今までのことを思い浮かべると、自然と涙が込み上げてきました。はーちゃんやあゆみ、ほかのみんなにも支えられながら過ごした二週間。キャンプに来たことによって、私はだいぶ変わったような気がします。色々な面でも強くなれて、色々大切なことを学べました。人は支えあって生きていくこと。みんなと協力すること。友達の存在がどれだけ大切か。人と人との絆。キャンプでのみんなに一言。ありがとう、そして、また会おう。

「約束」

中等部三年　前田　花帆（まえだ　かほ）

二百九十一日。そんなにも長い間、私は千晶に会えなかった。

千晶と私は補習校の一年生のクラスで出会った。八年間、一緒に補習校に通い続けた。ずっと二人で通い続けるはずだった。けれど、千晶は急に去年の十月に日本に帰国することになった。千晶は、友達、大好きだったこと、自分が歩むと思っていたアメリカでの道、そんなものすべてを全部置いて日本に引っ越していった。

私と千晶は、何千キロも離れてしまっても、ずっと連絡を取り合っていた。でも、メールやビデオチャットでは、本当に一緒にいるのとは違う。また会えるまでの日にちを数え続けていたが、いくら数えても、永遠にその日が近づくことはない気がした。

私は、千晶が日本の学校の話をするたびに、千晶がどんなに強いか改めて感じた。千晶はいつでも、笑顔で頑張れるということを、私に教えてくれた。学校、日本語の塾、英語の塾の三つに通っていて、普通の日本の子よりずっと忙しい。アメリカにいた時も、現地校と補習校、アメリカの中学生よりも大変だったはず。けれど、文句は言わなかった。私はその理由が分かる気がする。人生のほとんどをアメリカで過ごしている日本人として、小さいころから二つの国の間でバランスを取る必要があった。日本人で、自分たちが日本人だということを愛しながら、アメリカの文化を受け入れることは大変だ。けれど、私たちはすごく違う言語と文化を知ることができている。それは何よりも幸せなことだと思う。

日本で懸命にやっている千晶を見て、私も負けないぐらい頑張らなくてはいけないことに気がついた。中学生として日本に戻るという悪い夢みたいなことがあっても、千晶は全速力で走り続けていた。たぶん、不安な時や、もう頑張る気になれない時もあっただろう。そういう時に、私が支える責任があると感じている。本当の辛さや、どんなに大変かは私にわからないかもしれないけれど。

私が絶対いやだったことは、千晶が私たちの友情が前みたいではなくなっているかな、と思うことだった。いくら住んでいるところが遠くても、私たちがまだ親友だということを忘れてほしくなくて、私も忘れてないと安心させたかった。だから、私は年中千晶にアメリカを思い出すような小さなプレゼントを送っていた。そして、私のところにも、千晶らしさがあふれたプレゼントが届いていた。私が一番嬉しかったのは、千晶の性格がちっとも変っていなかったことだ。

千晶とは、四日間ずっと一緒に過ごした。この東京での四日間は、人生で一番早く過ぎてしまった四日間だった。隣に本当に千晶がいることに何度もビックリして、夢みたいだった。たぶん、二人とも四日間だけという短さに気がついていたけれど、どっちもそのことを口にはしなかった。何だか、その話をすると、一緒にいられる時間がさらに短くなるという不安があったのだ。

私がアメリカに帰る日、千晶は空港まで見送りに来てくれた。私がゲートをくぐるまでの一時間の間、「さよなら」を言うこと以外の話は何でもした。時間になって、並んでいる間も、私たちはしばらく何も言わずに立っていた。やっと、お母さんたちが、

「今さよならを言わないと、もう言えなくなるよ。」

と声をかけてくれた。そして、それでも、相手にどんな言葉をかければいいか分からず、相手を抱きしめるしかできなかった。

私達違う国に住んでいても、隣同士で歩いて行けなくても、お互いに頑張ることを約束した。千晶も、私も、もう一人が頑張っているということで、強くなれるから。私はその約束を守る。千晶に負けないぐらい頑張って見せる。

「心にはいつまでも残っている」

中等部三年　三井　寛子（みつい　ひろこ）

今年の夏休みは、始まる前からずっと楽しみにしていた。それは、二年半ぶりに日本への一時帰国が決定していたからだ。私は、海外生活が始まってから、一度も日本へ帰っていなかった。もちろん、一時帰国するのも初めてだ。祖父や祖母、小学校の時の友人に会え

ると思うと、楽しみで仕方がなかった。飛行機に乗ってからも、まるで初めて飛行機に乗る子供のようにわくわくしていた。

日本への道のりは、長いようで短かった。今回は友人の家に泊まらせてもらうことになっていた。空港からは、自分たちで電車に乗って向かった。二年半も行ってなかったにも関わらず、道は驚くほど覚えていた。しかし、着いたらとたんに不安になった。みんなものすごく大人っぽくなっていたらどうしよう。変わっていないのが自分だけだったらどうしようと。でも、友人は全然変わっていなかった。昔行った時と同じように出迎えてくれた。なんだかとても嬉しかった。

次の日もその次の日も、違う友人に会うことができた。みんな、多少大人っぽくなってはいたけれど、しゃべったり遊んだりするとやっぱり変わっていなかった。六年生の時のクラスの子もみんなで集まってくれた。受験生の夏でみんな忙しい時にも関わらず、ほんとに沢山集まってくれた。そして、みんなで小学校の時を語り合った。私はそのクラスが大好きだった。だから、できるならその時に戻りたいとも思っていた。そしたら、みんなもあのクラスはほんとに良かった、楽しかったと話していた。私はてっきり、こんなことを思っているのは自分だけで、みんなにとってはただの過去だと思っていたので、驚いた。私は、もし海外に行っていなかったら、こんなにこのクラスが仲良くなることはなかったんだろうなと思った。

一日だけだが、その小学校の時の友人がみんな通っている学校に体験入学した。今まであまりしゃべったこともなかった子なども沢山話しかけてきてくれた。授業も受け、給食も食べ、学校の様子もよく分かった。海外の学校では、給食の配膳もなければ、教室の掃除もないので、なんだか懐かしかった。しかし、一日などあっという間に過ぎてしまった。できるならばもっと居たいと思ったが、もう日本の中学校は味わえないと思っていたので、一日だけでも体験入学ができて良かったと思う。

それから、私の祖父や祖母にも会うことができた。もう体が少しずつ弱ってきていると聞いて心配だったが、四人とも元気で何よりだった。日本にいた時は、毎年夏休みも冬休みも欠かさず行っていた。それなのに二年半も行けなかったので、みんな私たちが来るのを心待ちにしていてくれた。トランプをして遊んだりと家族だんらんの時間を過ごした。アメリカでの生活について沢山おしゃべりもした。こんな風にしていると、普通に前のように日本に住んでるような気がして心が落ち着いた。自分はなんだかんだ言って、やっぱり日本が一番なんだなと改めて思った。

今回この一時帰国は、ほんとに充実していたし、なにより楽しかった。そして思い出も沢山できた。海外生活は、容易なことではないし、大変なことが沢山待ち受けているが、日本では体験できないようなことを私たちはできている。それはほんとにすごいことだと思う。また、いつ日本に帰らないといけなくなるかわからないので、ここでの生活に後悔がないようにしたい。

「夏休みの体験」

高等部一年　立石　恵利也（たていし　えりや）

今年の夏は今までの夏と比べて、もっとアクティブな夏休みでした。七月の一日から十六日まで友達の家族とマーサーズビニヤードまで行ってきました。行ったメンバーは、僕と僕の友達、彼の弟、お姉さんと彼女の友達二人、そして親でした。朝出発して三時間ドライブをしてから、フェリーに乗ってマーサーズビニヤード島まで行きました。マーサーズビニヤードでは、ホテルではなくキャンプ場に泊まりました。キャンプ場に着いてから、まずテントのセットアップをしたあと、僕たちは自転車で周りを見てきました。自然が多いところで、きれいな場所でした。初日はセットアップをしたり落ち着くため、どこにも行きませんでした。

二日目からは、朝はゆっくりし、昼は海に行ってきました。夜ご飯は自分たちで作り、そのあとはサッカーか釣りをして一日を終え

ました。海は二日以外、毎回サウスビーチという、波の高い海に行きました。別な日には映画ジョーズで、ジョーズがくぐった橋のあるビーチに行き、五メートルもあるその橋から飛び降りたりしました。僕は高い所が苦手なのに飛び降りられたのでうれしかったです。

海に行く他にも湖でカヤックをしたり、色々な町に行ってゲーセンや色々なお店に行ったりしました。七月四日には独立記念日の花火を見ようと思って行きましたが、曇っていて全然見られませんでした。

キャンプ場では、多くの家族が泊まっていて、そこにはサイクリングのキャンプの人たちも多くいました。友達はサッカーが好きなので、夜ご飯の後、ひまがあればしょっちゅう試合をし、キャンプ場に来ているほかの人も一緒に遊び楽しい時を過ごしました。

サッカーをしない時は、釣りに行きました。夕日が沈む一時間位前に行き、夕日をバックに釣りをしました。シーロビンという魚が多かったですが、シーバスやタイの一種も釣れました。ある日僕はサメを釣ってしまい、驚きました。それは結構思い出となるひと時でした。

こういう楽しい時も最後をむかえ、僕たちはキャンプ場を片付け、テントをたたんだりしました。その前の夜に雨が降ったため、テントを乾かさないといけなかったので結構時間がかかりました。片付けが終わって、とうとう僕たちは家に帰ってきました。

僕はこの二週間でいろいろなことを学べました。一つはネットやテレビがなくても楽しいときを過ごせることでした。他には、スポーツは知らない人でも一緒にできるということです。マーサーズビニヤードで過ごした二週間は本当に楽しい二週間で夏休みのハイライトでした。またいつか行ってみたいです。

「忙しい夏」

高等部一年　アギスキー　実奈（みな）

今年の夏は今までで一番忙しい夏でした。最初はミュージックフェスティバルに行ったり、友達の家に泊まったり、楽しく過ごしていたけれど、その後は大学のために絵のポートフォリオ作りを野外で一週間、室内で四週間、そのすぐ後に友達と遅めの誕生日祝いとしてシックスフラッグスへ行って楽しんできたすぐ後に、三週間のキャンプへＣＩＴとして行きました。一つ目の担当グループには九人のキャンパー、三人のＣＩＴと二人のリーダーで合計十四人の大きいグループでした。キャンパー全員、いい子で手間がかからなかったけど、やっぱりグループが大きいので、それはそれで大変でした。その間ＣＩＴの活動であるべきではない植物の駆除をしたりして二週間がたって、そのグループの子たちは帰って、新しいグループを受け持ちました。そのグループはキャンパー七人、ＣＩＴ一人、リーダー一人で合計九人という小さいグループでした。自分も一週間で帰らなければならなかったので、これは一週間のグループでした。小さい子は苦手でけっこう苦労したけれど一人十二才の子がいて、その子には色々手伝ってくれてありがたかったです。一週間の間に風邪をひいて熱を出してしまったり、目がはれて見えなかったりとハプニングがありましたが、一週間はあっという間に過ぎて家に帰ってきました。家に帰ったら、すぐ次の日にダンスのブートキャンプが一週間ありました。ブートキャンプは朝の九時から午後の三時までダンスをやって、お昼は十二時あたりに三十分だけありました。疲れたけど色々な新しいダンススタイルを体験できてそれなりに楽しかったです。今年の夏は忙しく暇がなかったけれど充実した夏でした。来年はもっと暇がほしいです。

「ダメ人間」

高等部二年　安倍　結花（あべ　ゆいか）

私はダメな人間だ。前からも分かっていたはずのことが、この夏、明らかになった。私はユナイテッドワールドカレッジ（ＵＷＣ）という学校に行きたい。ＵＷＣとは高校の最後の二年間に行く国際学校だ。入った生徒達の学費はスカラーシッププログラムにより、全部ただだ。だから、世界中の国々の人々が来られ、貧しい国の人達も

お金の問題がないので、入りさえすれば来れる。この学校の素晴らしいところは、世界中の子供達が集まり、英語をしゃべって二年間共に暮らすことだ。四才の頃からアメリカに住んでいる私は、色々な人種の人達との違いにさらされ、悩まされ、乗り越えてきたので、世界平和には強い思いを持っている。私の夢は、シンガーソングライターになることだ。アメリカに来て、これまでにあった色々なことをのりこえ、アメリカという国を自分の国のように思えるようになったのも、音楽のカでみんなに認めてもらい、コミュニケーションができたからだ。音楽はどこのだれにでも通用するもので、人々の心を一つにできるものである。だから私は頑張ってこの学校に入り、そんな素晴らしい音楽を作って世界に残したい。

　でもそんな思いは、ただの口だけのキレイごとであった。夢に向かって頑張っているつもりでも、私はそんなステキな人ではなかった。昔からそんなことは分かっていたが、「いつかはそんな人になろう。今はムリだけど、いつかはそんな人になるんだ。」と、時間がたてば自然とそういうキラキラ輝いている人間になれるという、甘い考えをもっていた。そんな自分に気付いたのが、つい何週間か前のことだった。勉強しなければならないのにどうしてもパソコンに手がのびてしまう。「ちょっと休憩」にしたら、ドラマを見始め止まらなくなり、「ちょっと」が二時間にのびてしまった。セブンティーンの雑誌を読んでいたら、F太さんといういうお悩み相談のブログを持っている人が紹介されていた。その人に相談をしていた一人の子は、私と同じような悩みを持っていた。「頑張らなきゃ、頑張りたいという気持ちはあるのに、どうしてもやる気が出てきません…。」私はその記事を切って、ノートに貼った。F太さんは何とかしたいと思う、やる気のスイッチがONの自分と、ダラダラしたいというOFFの自分がいると言っていた。OFFの時の自分にはじっくり休んでもらって、ONの自分はどういう時にONなのか考え、ONの自分を増やしていこうと言っていた。でもこの選択は私のようなダメ人間には通用しなかった。OFFの自分を休ませるといつまでも休んでしまう。ONの時に頑張ると、その後は満足してしまう。例えば、やっと図書館に行って一日中勉強した日は、夜遅くまでドラマを見てしまい、次の日に体調をこわしてしまった。体調をこわした私は、またまたOFFモードにリセットされてゆく・・・。

　でも、私はまだ希望を捨ててはいない。図書館に行って一日中勉強した日はつらくてヘロヘロになると思いきや、スッキリした前向きな気持ちになり、もっとやりたい、頑張りたいと思い始めていた。一日中頑張った私のほうが、一日中ダラダラしてしまった私よりも、はるかに幸せだったということが分かった。だから私は変われると思う。頑張れることの幸せを分かったからには、ダメ人間から頑張り屋さんになれると信じている。

　もう遅いかもしれない。今からでは行きたい学校に受からないかもしれない。そんなことも思った。でも、もしそうだとしても、これを自分を変えるきっかけにすれば、絶対後悔しないと思う。前の私のように、「いつか、いつか」とばかり言っている人間ではなく、「今」を頑張って生きている人間に、私はなりたい。なぜなら、「いつか、いつか」と言っていては、その「いつか」はいつになっても来ないのだ。「今」と言った瞬間に、その「いつか」が始まるのだ。この夏は、そんな「今」の大切さが身に染みて分かった。

「僕の留学」

高等部二年　木原　慧人（きはら　けいと）

　今年の夏休みに僕は一生心に残るであろう体験をした。それは日本への短期留学だ。ことの始まりは、父の会社で面白い奨学金留学制度があるということをきいたことからだった。アメリカ在住の高校生が日本に短期留学が出来る制度だ。行先が特定されていないというのも面白いプログラムだと思った。受かるかどうかはわからなかったが挑戦してみた結果、僕の留学が決まった。僕はカリフォニア州で生まれて、三才からずっとニューヨークで育ち、日本語は補

習校で学んだものを家族との会話で使うくらいのものだったので、ぼくにとって日本の高校へ行くことは本当の意味での留学だ。

行き先は愛知県の武豊町と決まった。六月九日に奨学金をもらった学生たちと一緒に、カリフォニア州でのオリエンテーションへ行った。日本へ行くのは九十人ぐらいで、アメリカ各地から集まって来ていた。そこで三日間オリエンテーションをして、友達をいっぱい作った。みんなこれからの体験を楽しみにワクワクしていた。日本が好きな子ばかりで話がいろいろと弾んだ。

日本での六週間は毎日が新鮮な体験だった。素敵なホストファミリーに恵まれて、僕が通った愛知県立武豊高校のクラスメートや先生方はみんなものすごくいい人達だった。町は浦島太郎伝説の海のそばで、田んぼに白鳥がいたり、火力発電所がそばにあったり、大きなプラザがあったり面白い所だ。

車が無いとどこにも行けないアメリカで育った僕は、自転車で友達とどこにでも行ける自由を楽しんだ。僕は小さい頃ヘルメットを被り、ニーパッドをつけて、バイクトレイルに両親に連れて行ってもらったぐらいしか自転車に乗ったことはなかった。おかげで、あまり上手に乗れないのでホストお母さんに笑われ、お父さんに自転車の乗り方を教えてもらい、学校の友達がいつも「大丈夫か？」と初めは心配してくれた。武高の友達は自転車をとてもうまく乗る。手を使わないでこぐし、足をペダルにつけないで坂を下りる。遊びとしては、歩道の横のでこぼこしたコンクリートの上にどれだけ長くバランスして進めるかを競ったりする。僕はこの夏自転車に乗るのがすごくうまくなって、色々なところに行けるようになったことが一つの大きな自慢だ。隣町のスポーツ公園まで一時間以上かけて行ったこともある。しかも三十八度の気温の中でだし、友達もさすがにこれほどの距離だとは想像していなかったほど遠かった。我ながらすごいと思った。

留学先の学校生活はとにかくものすごく楽しかった。ホストグランマとお母さんが毎日おいしいお弁当とお茶を持たせてくれ、自転車で毎日二十分通学した。いつも寝坊するので学校に着く頃は遅刻ギリギリで、遅刻した日もあった。面白かった授業はいっぱいあったが、苦手だったのは古典の授業だ。全然わからいので漢文のレ点、一点、二点、が０点、１点、２点に聞こえ、ギブアップした。得意のはずの英語のテストで一回五十点を取り、自信をなくした。部活は吹奏楽部に入ってトランペットを吹かせてもらった。ホストお父さんが働いている地域の大きいホールでのコンサートにも出させてもらい、とても良い思い出になった。学校にはたくさんの行事があり、防災訓練や「覚醒剤だめ！」の映画をみたりした。僕にとって一番思い出になった行事は体育祭で、僕はソフトボールに参加した。体育祭は全校行事だったので二年生、三年生の先輩たちとも試合をした。日本の学校の先輩達は下級生をいじめる怖い存在だと思っていたが、武豊高校の先輩たちはその真逆だった。僕ははっきり言ってソフトボールは初めてだったので下手だったが、ヒットするたびにクラスメートや相手チームの先輩たちが応援してくれた。全校行事はアメリカの学校にはほぼないので、全校での交流があることはとても良いことだと思う。

六週間の留学が終わって、成田にみんなが集合してアメリカへ向かった。僕と一緒に日本に短期留学した仲間達もみなそれぞれいろいろな町で楽しい学校生活を送った。悪い経験をした人は一人もいなかった。日本の文化や学校のことを彼らは学び、また日本の人達は彼らから学んだと思う。フェイスブックグループでは留学生の仲間は皆、絶対に東京オリンピックへ行くともう決めている。日本がますます好きになったようだ。学生時代の留学はみんなが経験できると本当に良いと思う。世界がもっと仲良く理解し合えるようになるに違いない。

この夏の経験から僕はますます日本が好きになった。僕は日本人に生まれて本当に良かったと改めて思う。これから大学へ行って国際関係の勉強をして、日本に関連のある仕事をして生きて行くのだ、とはっきり自分の進む道が見えてきた。僕はまたいつか武豊に行き

たい。友達といっしょにバスケをしたり、自転車で遊びに行ったり、ホストファミリーと一緒にご飯を食べたり、また日本の生活をしたいと思う。武豊での思い出は一生忘れない。